

的には蜀江が正しい。あるいは底紅か), Usirasji Borri (後紋)。

昔から「シャムロ」という品種があり、「社室」と書かれたこともあるが、これはタイ国の日本における旧名に基くものであると推定している。これに大小種の区別をしているものとした。「重輪」は「十輪」, 「中り丸」とも書かれたことがある。仮名に濁点がない時代に、だんだん別の字に変わって来たものらしい。「後紋」は少し苦しい当字である。ケンベルは「堀」に関係づけて写音しているようである。「芯鑷」はおしべが退化していて、くり取ったような花型のものであるらしく、現在のシベナシワビスケ(本誌41巻12図版上参照)の如きものであったと思われる。「芯鑷」は剪花翁伝 1851のワビスケ(実はシワビスケ)の項に、このような状態を示す一般的客語として用いられている。「鎌倉山茶花」はツバキの品種ではなくて、ハルサザンカの品種群に入るものであり、今日の「鎌倉紋」にあたるものであろうか。剪花翁伝の「鎌倉山茶花」を中だちとしての推定である。

西欧人に対して特に厳重な警戒と制約を加えた元禄時代の徳川政府の下で、ケンベルが二度の江戸参府旅行の間に植木屋かまたはこういう植物にくわしいどのような人と接触し得たのか今ではもう分らない。彼は恐らくこれらの実物は見てはいないと思われるが、その写音はおおむね正しいことが分る。彼の記録した品種の一部は現存の品種と呼称が全く同じであり、または関連がある。また他の一部は幕末の文献にまで断続して残っている。アカデミーの外の世界での「植木屋の伝統」の根強さを遺憾なく示していることは注目すべきことである。以上の文をまとめる際に、典拠とした多くの文献類に関しては読者の興味の外にあると考えてここでは省略した。

(お茶の水女子大学)

### ○ボルネオ島産クルマバモウセンゴケの染色体数(近藤勝彦) Katsuhiko KONDO: Chromosome number of *Drosera burmanni* Vahl from Borneo.

クルマバモウセンゴケは沖縄以南、東南アジア、インド、オーストラリア北部という広い分布をする。花卉は通常白色であるが、ボルネオ島ブルネイ地方には赤色のものが自生する。1964年、大阪市立大学理学部附属植物園の立花吉茂氏らがボルネオ島に植物調査旅行に行かれた際、これが採集、生品が日本にもたらされた。それ以来、二、三の人々により栽培、系統が維持されている。今回この系統のクルマバモウセンゴケの染色体数を調べてみた。根端細胞で  $2n=20$  (Fig. 1) であった。この結果は Venkatasubban (1950) がかってインド産の同種を使用して得られたものと同じである。ボルネオ島産クルマバモウセンゴケがインド産のものと染色体数にな

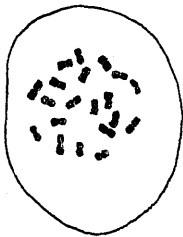


Fig. 1. Somatic chromosomes ( $\times$ ca. 1450) of *Drosera burmanni* Vahl from Borneo  $2n=20$ .

んらの変化のみられなかったことをここに記しておく。

(Department of Botany, The University of North Carolina, Chapel Hill North Carolina 27514, U. S. A.)

**○アサクラザンショウ、ブドウザンショウの栽培と利用 (佐々木一郎) Ichiro SASAKI: Propagation and utilization of Asakurazansho and Budouzansho, the cultivars of *Zanthoxylum piperitum*.**

奈良県や和歌山県では、生薬や青果物としての山椒の栽培が盛んで、特に奈良県吉野郡、和歌山県伊都郡がその主産地である。山椒は果皮を生薬や粉山椒とし、幼果、雄花、若葉を佃煮とし、実生 1~2 年の小苗は冬季に室に入れ、若芽を芽山椒といって、つまみ物とし、刺の多いこぶの多い幹は人形やすりこぎにされる。

上記の土地で栽培されるサンショウは、刺の無いアサクラザンショウか、殆んど刺の無いヤマアサクラザンショウ系統のものである。これ等の苗作りは殆んど接木によるもので、良い系統のアサクラザンショウを無性繁殖したものである。最近では昔の様に雌本のみ繁殖でなく、雄本も花の佃煮を観光地で販売するため栽培されている。雌本は果実が 7 月頃迄青く種子の黒くなるのがおそい種類で、この方が八百屋や生薬としても高価に取引されるのである。

最近ではブドウザンショウとよばれる栽培品種が植えられている。この品種はアサクラザンショウより葉は少し大きく、ややしだれ気味で、繁殖は 9 月中旬頃に芽接するか、春に切り接をして居るが、主に芽接で苗作りをしている。1 年目は普通のサンショウの様に刺が出るが、2~3 年苗では刺が無く、この果実の房はアサクラザンショウよりも大きく、粒も多くて、果実を乾燥するとアサクラザンショウの果皮より厚く乾燥歩留りもよい。今後はこの品種がアサクラザンショウに置き替えられる品種の様に思われる。

(津村研究所)

**○傾光植物、非傾光植物の開花について (柳沢新一) Shinichi YANAGISAWA: On the flowering of photonastic and non-photonastic plants.**

ムラサキカタバミ、カタバミ、ハコベ、ツメクサ等の 10 数種の傾光植物に於ては、開花は天候に左右され、快晴、晴、薄曇には開くが、曇、雨天にはとじる。そして夜間開花は見られない。ところが、キク、ツバキ、シロウメ等の 163 種の大部分の一般植物は、天候に左右されず開花し、かつ夜間開花が認められる。シロウメに就いて見ると、花時計が示す様に開花するのは、日中の日の出ているときだけでなく、夜 12 時にも開き、午前 3 時にも半開となるものが加っていることが確認出来る。つまり一般植物は光に鈍感であり、天候によって受ける光の強さに影響されることなく、夜間にも開花が見られるのである。それからもう一つは温度に不敏感なことが挙げられよう。それに関係していると思われるが、45 年の春の寒気に対して、傾光植物は開花が 10 数日遅れたのに対し、一般植物は数日遅れたに過ぎず、鈍感そのものであることが判る。夜間開花の特例としてオシロイバナが数えられるが、これも夜間に開花する以外に、日中の雨天にも開くこと、並びに低温のとき開くことが認められるのである。これらから一般植物即ち大部分の植物の花は、光の影響があまりなく、且つ、温度にも鈍感であることが知られる。その結果、夜間開花という現象が見られるのであると考えられる。

(前埼玉果蚕業試験場技師)